
私とネコ

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私とネコ

【Nコード】

N3337R

【作者名】

RAN

【あらすじ】

ある日突然猫に話しかけられた。

一見普通の女子高生と喋る三毛猫の交流。

それぞれの背負った過去が複雑に絡み合う。

シリアスあり、コメディあり。

サイト、dノベ転載

私とネコ【1】

「ねえ、そこのお姉さん」

声が背後から聞こえて、光ひかりは背後を振り返る。

しかし、そこには誰もいない。

ただ今歩いてきた国道がずっと続いているばかりだった。気のせいかと思い、また陽炎で歪む先の道を歩き始める。

「ちょっと！ 下だつてば！」

また声が聞こえて、言われた通りに振り返って下の方に目を向けた。

するとそこには

「そうそう。やっと見てくれた。こんにちは」

見ようによっては笑顔のように見える顔の 三毛猫がいた。

「……………」

光はしばらくそこに固まって、猫を凝視していた。

猫は光が動かないので、少し近づぐ。

「もしもし、お姉さん？ 大丈夫？」

猫が近づくと同時に、光は猫のわき腹を捕まえ、持ち上げ、なおも凝視する。

「なに、なんですか」

猫も少々うつろたえ始める。

すると光が口を開いた。

「それはこっちの台詞よ。こっちがまず何って感じよ。喋る猫って何よ」

「まあ、そこら辺は気にしないで……」

「気にしないわけないでしょ」

「話すと長いから簡潔にまとめると、お星様をお願いしてたら喋れるようになったんだよ」

「……………」

光はいかにも疑わしげな目で猫を見る。

猫もそれを感じ取る。

「うわあ、全然信じてないね」

「信じろって言うの？」

「ってか、僕にもよくわかんないし」

「まあ、それはいいことにした。で、あんたはあたしに何の用なの？」

そして、光は猫を地面に下ろした。

やっと本題に入れてホッとした猫は、また先ほどのように明るい調子で話します。

「僕が喋れるように願ってたことは本当なんだよ。僕は人間と話してみたかったんだ」

今度は光がしゃがみこみ、猫と目線を合わせて話を聞く。

「なんでまたそんなことを」

猫の顔が真剣なものに変わった。

猫に表情を感じている自分に違和感を光は感じていた。

「欲することに理由はいるの？」

「猫のくせにいいこと言うじゃない」

光は軽く口端を持ち上げて笑って、猫の頭をなでた。

「伊達に喋れるわけじゃないんだよ」

猫は嬉しそうに光の手にまわりつきながら言う。

「こついうところは猫らしいと光は感じた。」

「で、あんたはあたしに何をしてほしいの？」

光が聞くと、猫はまわりつくのをやめ、光の目をまっすぐに見た。

光は、その強い目を受け、心臓が強く鼓動した。

「僕のお友達になってよ」

強い目は一瞬のことで、また次の瞬間には、猫の顔には笑顔のような歪みがあった。

光は、この猫に強い興味を抱いていた。

「いいよ」

「ただいま」

光は家の扉を開け、誰もいない空間に向かって、つい癖となってしまうた言葉を言う。

そして、そのまま黙って家にあがる。

「すぐ外に出るから、あんたはそこで待ってるのよ」

「りょーかーい」

玄関には猫がいる。

そして、その猫が笑顔のように顔をゆがめて、尻尾を振って答えた。

この猫は、先ほど光に声をかけてきて、そのままついてきているのだ。

人語を解するのは伊達ではないようで、なぜ光があがらないで欲しいかもしっかりわかっているようである。

光の家は酪農家で、彼女が街の学校から帰ってくると、すぐに家を手伝うようになっていた。

光は鞆を置いて、セーラー服から長袖Tシャツとジャージに着替え、すぐに玄関へと向かう。

「あんた、仕事場までついてくるの？」

そこで八々と気付き、猫に光が問う。

「うん、どんなことしてるのか見てるよ」

「あんまり相手してやれないわよ」

「全然構わないよ」

「じゃあ、ついておいで。」

邪魔しなければ父さんも母さんも何も言わないでしょう。猫なんていっぱいいるし」

光の家には、すでに猫も犬もいた。猫3匹に犬1匹がいる。

彼らとこの猫がケンカしないことを願うのみだ。

光はそうして靴を履き、外へと出て行った。

牛舎があるのは、家のから向かって左側にある。

「うーん、やっぱり牛小屋って臭いね」

「牛小屋って言うな。牛舎と言え」

猫が牛舎に入った途端に言った一言で、光は急に現実に戻された。

そう、いくら牛がかわいなくても、この現実が消せない。

中学校の頃はとも嫌だったが、今では開き直っている。

気持ちを切り替えて、光は父や母を探す。

「そういえば、あんた父さんや母さんいる所で喋ったりしたらダメだからね」

「わかってるよ」

そうしてるうちに、牛のフンをかきだしている父を発見。

「お父さん、ただいまー！」

大声を出していないと、搾乳などの機械の音に消されてしまう。

光の声に気付いた父は、手を止めて、光の方を向いて、手を奥の方へと指し示した。

奥から道具を持ってきて手伝え、ということのようだ。

「じゃあ、あたしは手伝いに行くから、あんたは適当にブラブラしてなさい」

光はしゃがみこんで、猫に小声でそう伝える。

猫はニャーと鳴いて、了解の意を伝えた。

逆に猫らしくされると気持ち悪いな、と光は思ってしまった。

そうして手伝いをして、そろそろ空が赤くなってくる頃、母が光の近くに来た。

「そろそろ夕食の準備するから、一緒に帰るかい？」

「うん、そうね」

光は一応学生である。

宿題などもあるから、手伝いをずつとしているわけにもいかない。

軽くではあるが、一日の予習復習もしているぐらいだ。

ただ、好きな科目に重点を置いている、というのが難点ではあるが。

そして牛舎から出ると、あの猫が光の所に寄ってきた。

「あら、その猫どうしたの？　うちの猫じゃないね？」

母が猫に気付いて、立ち止まる。

「うん、なんか道歩いてたらついてきたの」

光も立ち止まり、母はしゃがみこんで猫をなでた。

猫はゴロゴロとのを鳴らし、母にじゃれついた。

もう猫のフリをしているのか、ただ甘えているのかわからない。

「あんたっていつつもそうね。なんか知らないけど動物ついてくるのよね〜。」

でも、もうそんなに猫も飼えないよ？」

「大丈夫でしょう。その猫はその猫でなんとかやるわよ」

「うん、まあ、そういうことにしとくか」

この母にこの娘あり。豪快というか何というか、物事をあまり気にしない親子である。

「でも、名前ぐらいつけてもいいんじゃない？」

「名前？」

飼えない、という割には、かわいがる気満々な母である。

でも、今いる猫3匹もそのようにしてここにいつているのだから、光はいつものことだと思っていた。

「じゃあ……………アルにしようか」

光は猫を見下ろして、確認するように言う。

猫 アルはニャーと鳴いた。声の調子から、嫌ではないことがわかった。

「アルね。何か意味でもあるの？」

「……………別に」

光はなんだか煮え切らない引きつったような笑みをつかべて答えた。

母はあえて追及しなかった。

そして、二人と一匹は家へと向かった。

もちろん、一匹は家の前で止められるのだが。

私とネコ【2】

光はものすごい形相と、ドスドスという形容がまさにぴったりな足取りで家に入っていった。

光についてきている三毛猫のアルは恐ろしかったので、それを黙って木陰から見ている。

少しすると、光はTシャツとジャージといういつもの服装で出てきたので、また手伝いをするのだろうとアルは黙ってその場にいると、光がアルに近づいてきた。

「ちよつと一緒に来なさい」

そう言つと、光はアルを片手で抱え込み、母専用の紺の軽自動車に乗り込んで、エンジンをかけた。

「ちよ、ちよつと光！ 免許なんて持ってないでしょ?!」

アルは慌てて光に問いかける。

「無免許運転なんて、田舎じゃ常識よ」

そう言つと、光は車を発進させた。

え。

アルは心で嘆いていた。

人語を解するだけに、感情の動きなども人のようになっていようだ。

光は、どこへ向かうのかと思つたが、家から出ると、国道を横断し、向かいの山への道を走り出した。

少し公道に出たものの、向かいの山は光の家の土地なので、私用地内の運転となる。

無免許運転なんて〜と言つてはいたが、やはり少しは気にしていたようだ。

アルはホっと一安心した。

運転も、砂利道で道路状況は悪いのに、なかなかうまくこなしている。

しかも、周りは草木が生い茂り、フロントガラスにかかってくるほどだ。

オートマであるから運転しやすいのかもしれないが、一回や二回運転したことがある程度ではないだろう。

そうして石とタイヤがぶつかる音をさせ、揺れて走っていると、開けた所に出た。

そこだけ緑が広がる　牧草畑だった。

光は畑に入る手前で車を止めた。

そして、扉を開けて、畑の中央へと進んでいく。

そこからは、木々の間から下にある光の家が見えていた。

その向こうにはまた木々が伸び伸びと生い茂る豊かな山が立っている。

左を見ても、右を見ても、ただ国道が向こうへ続いているだけだった。

たまに、そこを車が通る音が山々に響く。

左側には、少し家が見えるが、そこもまた同じ酪農家。

もう少し向こうに行けば、店などがある街が見える。

光は、それらの景色をゆっくりと首を回して、しばらく眺めていた。

アルも光の後についていたが、背が低いため、光が見ているほどの景色は見れなかった。

黙って前を見据えていた。

が、しばらくして、飽きてきたのか、アルが口を開いた。

「なんか学校であったの？」

光はその場に座った。

視線はまだ前を見ている。もう景色を見ている訳ではないようだ

が。

「うん、まあね」

そこで声は途切れる。しばらくの沈黙。

光とアルはただ前を見ている。

空はだんだんと赤く染まり始めていた。

夕空の赤い太陽は、強く一人と一匹を照らす。

目の前にある眩しい太陽に、一人と一匹は少し目を細める。

「明日、ちゃんと謝るんだよ」

アルはなんとなく何があったのかを悟って、そう言う。

光は少しその顔に笑みを浮かべた。視線はただ前を見ている。

「うん」

「ねえ、光」

早い時間にも関わらず、すでに太陽の光が強さを増してきている朝、バス停に立つ光の横に、背筋を伸ばして座っているアルが呼びかける。

「何？」

光はアルの方を見ないで、前を向いたまま応える。

「僕も学校に連れてってよ」

アルの一言の後、しばらくの沈黙。

アルは焦らされる思いで黙って返答を待っていた。

「……おとなしくしてるのよ？」

それは是の答え。

「うん」

アルは嬉しそうに光を見上げた。

光の顔にも、柔らかな笑みが浮かんでいた。

アルがこのようなことを頼むのは珍しい。

いつも澄ました顔をしているアルの、たまに見せる無邪気な仕草が光はかわいいと思っていた。

光は手持ちのスポーツバッグを道路に置き、チャックを開く。

「ここに入りなさい」

アルがバッグにスルリと入り込むと、バスが道路の向こうからやってくるのが見えてきた。

「行くわよ」

光はそう言っ、止まったバスに乗り込んだ。

学校に着いた光は、裏に行つてスポーツバッグを地面に置き、その口を開けた。

中からアルが飛び出し、キョロキョロと辺りを見回す。

「適当にウロウロしてなさい。でも、みんなに迷惑かけるようなことしたらダメだからね」

「わかつてるって」

アルは嬉しそうに軽やかに、向こうに歩いていった。

光は少しの間、アルを見送ると、自分の教室へと向かった。

教室に入ると、そこはいつもと同じように、生徒達がそれぞれ雑談をしながら過ごす、賑やかな教室だった。

「あ、光、おはよう」

光が教室に入ってくるのを見つけて、友人の藍あいが声をかけた。光も藍に向かって笑顔で応える。

「おはよう」

光も、藍のいた人の輪に入り込んだ。
光は、学校では特に目立つこともない生徒である。
今日も、何事もなく授業をこなし、一日が終わった。

放課後になり、帰宅するために、光は学校の玄関まで藍と一緒に
出てきた。

「あ、ちよつと裏に行かないと行けないんだつた」
光が思い出したように言う。

藍はそれを聞き、訝しげな顔で光に尋ねる。

「ん？　なんで？」

「え、えーと、なんて言うかさ……その……」

光は少し言いづらそうに歪んだ笑顔で言葉を濁す。

藍はますます訝しげな表情を濃くし、光のその表情で、何かある
ことを鋭く嗅ぎつけた。

「あたしも一緒に行くわ」

光は、渋々ながらもそれに頷くしかなかった。

そして、校舎の正門とは反対の裏側に来ると、アルがすでに待ち
構えていた。

光の隣に見知らぬ人の姿を見て、アルは猫のフリをするのを忘れ
なかった。

ニヤーとかわいらしく鳴き、光の側に寄ってくる。

いつものアルを知っているだけに、光は複雑な気持ちで近づいて
くるアルに向けてスポーツバッグを開け、中に入れる。

その様子を黙って眺めていた藍は、口を開いた。

「何？　光の猫なの？」

光は目線は下に向けたまま立ち上がる。

「……うん」

そして、そのまま後ろを振り返り、歩き出した。藍もそれについて歩き出す。

「また猫についてこられたの？」

「う、うん、まあね」

いつも、光のバス停までの短い間二人は一緒に歩いて帰るのだが、今日は少し違った。

「なんで学校にいるの？」

「……連れてきたの」

「なんで？」

「……………」

今日だけで何回藍の「なんで」を聞いただろうか。

光は居たたまれない思いだった。針のむしろである。

針は一つしかないと言うのに、何千もあるように感じる。

さて、連れてきた理由をどう説明すればいいのか。

光は返答に困った。

バス停に着いてしまつて、そのまま藍も一緒にいて、今のこの状態にあるので、逃げることもできない。

早くバスが来ないかと光は祈る。

その様子に藍は少し悲しげな色をその顔に浮かべる。

「あんた、あの時のこと忘れた訳じゃないわよね？」

藍の、重い声で紡いだその言葉に、光は思わず体を大きく震わせた。

アルもバッグの中で会話を聞いていたが、なんとなく気になり、注意を向ける。

藍はそのまま言葉を続ける。だが、先ほどとは話題を変えるように、言葉の調子を元に戻した。

「その猫の名前は何？」

「……………」

まだ光は黙っている。視線は下を向いたままだ。

スポーツバッグを握る手に力がこもる。

日が照りつける中、手だけ余計に熱がこもっている気が光はした。

「何？………言いなさい」

藍の言葉が冷たく響いた。

コンクリートの熱に包まれる中で、その言葉だけが氷のように光に刺さる。

光は唇を恐る恐る開く。

どこかぎこちなく、まるで自分のものではないように動かしづらい。

「………アル」

藍は表情を変えずに、バス停の前、向こうにある山の上を見つめて、その言葉を聞いていた。

「あんたまだ忘れてないのね」

藍の言葉の調子が、また悲しげに揺れる。

光はきつく目を閉じ、吐き出すように小さく言葉を出す。

「………忘れられるわけ、ないじゃん」

その言葉をかき消すように、バスが光達の前に止まった。

光はそのまま何も言わずにバスに乗り込む。

藍から隠れるように、前の席の奥に入り込む。

そして、バスは発車した。

藍は、黙って去っていくバスを眺めていた。悲しげに目を細めて。

私とネコ【3】

光は黙って自分の部屋に入ると、大きな音をたてて扉を閉め切った。

そして、ベッドに倒れこむ。

しばらくそのままだったが、後方でゴソゴソと何か動く音がしている。

それで光は、アルをスポーツバッグに入れたままであったことを思い出した。

無言でゆっくりと起き上がり、スポーツバッグをノロノロと開ける。

アルはバッグの口から顔を出す。

「もー、暑くて死ぬかと思ったよ。さっさと出してよね」

アルは顔を出すと同時に、そう文句をたれた。

飛び出ないのは、光がアルの汚れた足をふくのを待っているのだ。

「……うん」

光はただアルを視線の定まらぬ目で見ていた。

アルは困惑に顔を歪めた。

実際、なぜ光の様子がおかしいのかわからないので、対処のしようがないのだ。

「光、足ふいてくれないと僕外に出れないんだけど」

とりあえず、普通に振る舞うことが最良かとアルは考え、光にそう言う。

「ああ」

光は顔の表情を変えず、感情のこもっていない言葉だけのものを

出して、部屋から出る。

そして、足ふき用の布巾を持ってくる。

アルはやっと足をふいてもらえたので、バッグからヒョイと出た。「僕は外に出た方がいいかい？」

アルは光を見上げて尋ねた。

「……………ううん、ここにいて」

光はアルをそっと抱き上げて、その胸に抱え込み、床に横になっ
た。

アルはされるがままでいたが、不可解な光の行動に戸惑っていた。
このままでいるのもどうかと考えたアルが、疑問を言葉に出す。

「どうしたの、光？」

「……………」

光はしばらくそのまま黙っていた。

が、ポツリポツリと話し出した。

「アルって名前ね、昔、私が好きだった人の名前なの」

その口調は、昔のことを思い出すように、自分に聞かせているよ
うにも聞こえた。

アルは神妙な面持ちでそのまま光の言葉を待った。

「ネットのチャットで知り合ったの。」

近くに住んでるってことがわかって、会うことになって…………。

アルって名前は、その人の本名有田ありた 優まさるの初めと後
ろの音を取ったものだったのよ」

「その人と光は恋人だったの？」

アルは目線を下に向けたまま、やや重い声で光に聞いた。

「お互いにそういうことは言わなかったけど、そう思っただけだと
思っ」

「何で、その人とは今会っていないの？」

藍との会話で、なんとなく二人の関係は良くないことになったの

だな、ということアルは察していた。

光は大きく鼻から息を吸い、鼻から吐いて、ため息をついた。
「親にそれがバシて、反対されて、会えなくなったの。」

でも、それだけじゃなかった。彼は、人間でさえなかった」

「え……？」

アルは大きく目を見開いて、少し身じろぎをして光の方に首を向けた。

そんなアルを押さえるように、光はますますアルをきつく抱きしめた。

アルは首を戻し、また黙って聞くことにした。

「会えなくなつてからしばらくして、彼が私の部屋に現れたの。」

ここ2階なのに、窓の所に来たのよ。

窓をコンコンって叩いて。彼、窓の外に浮いてたのよ。

しかもその時は夜中だったんだけど、なんか白い……着物みたいな着てて、ぼんやり光ってた」

過去の断片が言葉として光の口からこぼれる。アルはそのまま動かない。

「それで、彼が言ったのよ。」

「今までありがとう。こんな形で会えなくなったのは残念だけど、どうせ僕達は別れなければならなかったんだ」

どうしてって聞くと「だって僕はもうすぐ死ぬから」って。

実は彼は不治の病に侵されていたの。魂だけが抜け出て、私と会ってたつて。

そして、私が最後に会った夜に、彼は死んだらしいの。

「最後の挨拶に来たんだ」って、彼は言った。

それだけ言つて、彼は私に何も言わせないでその場から消えたの。そこで光の言葉が途切れる。

アルは黙ったままで、一つも動かない。

光は静かに涙を流していた。

しばらくして、光がアルを抱えたまま起き上がる。

光に晩御飯のお声がかかったからだ。

そういえば、今日は手伝いをしなかったのに、何も言われていない。これから言われるのだろうか。

光は素早く制服から普段着に着替えて下に降りていった。

アルは入り口とは逆の方向を向いて、自分はもしかしてご飯がもらえないのではないかと密かに心配していた。

そして、光がご飯やその他もろもろを終えて部屋に戻ってきた。

アルのご飯はちゃんと持ってきてもらえて、ひとまずアルは安心した。

「ねえ、アル、今日は一緒に寝ようか」

アルはその言葉に動揺した。

「え、な、い、いきなり、ど、どうしたの？」

しかもその動揺を隠しきれていない。

光はそんなアルを訝しげに眉をひそめて見た。

「なんでそんなに驚いてるの」

「え、いや、別に。光がそんなこと言うとは珍しいな」と

アルは光に向けて、顔を笑顔のようにゆがめた。

しかし、その笑顔はいつものそれより、かなり不自然に見えた。

人間で言うなら、苦笑いにも見える。

「何をもって珍しいのかわからないけど……まあ、私だってそういう時もあるのよ」

いつのまにか、口調は通常の光に戻っていた。

「そ、そうか……」

アルは目を横にそらして受け答える。

光は釈然としないものの、あまり気にしないことにして、話を進めた。

「さて、寝るわよ」

「もっ?」

いつもの光ならここで授業の準備をしたりするのだ。

「うん、なんか眠たいから」

そう言っつて、光は明かりを消して、アルを抱き上げてベッドに向かった。

「僕を押しつぶさないでね」

ベッドに入り込んだ時にアルが言う。

「たぶん大丈夫だと思うけど、まあ、その時はそっちで対処してよ」
光はそうして、アルの隣で眠りこんでしまった。

「……………」

アルは少し不安を残しながらも、おとなしく眠りにつくことにした。

ふと、窓の外を見ると星が輝いていた。

ここは山の中だから、周りに星の光を遮るものがない。
星の美しい輝きが窓いっぱいに見えた。

アルは、常々猫としての自分の無力さを感じていた。

もし僕が人間だったら

アルは強く星に願った。願わずにはいられなかった。

どうしたら光を幸せにできるのか。

アルが考えることはそれだけである。

私とネコ【4】

熱い眩しさを感じて、光は目が覚めた。

目覚めて、自分の目の前にあるものを疑った。

同じベッドに、同じ年ぐらいの少年が気持ち良さそうに眠っているのだ。

しかも、その顔は見たことあるものだった。

見たことがあるどころの騒ぎではなかった。

それは、まさにアルの 有田優その人の面影だった。

だが、ここにいるはずがない。

昨日一緒に寝たのは三毛猫のアルのはずだ。

「ちょっとすいません……」

光は動揺しながらも、少年の肩を揺さ振って起こす。

少年は身じろぎをして、目を開けた。その顔はまだぼんやりしている。

「あの……あなた、一体誰ですか？」

光は少年の顔を覗き込んで問う。

少年は光に目線を合わせて、聞かれたことを考えているようだ。

だが、何を言っているんだ、と訝しげな顔をしている。

「誰って、なんでそんな……」

少年は起き上がりながら答えようとして、起き上がろうとした時に言葉を詰まらせた。

声まで彼に似ている。

光はますます混乱をつのらせる。

とりあえず少年は起き上がり、自分の顔、体を触る。何かを確認するように。

少年は信じられないことが起きたような顔つきで、光の方を見る。

「……………僕って人間……………？」

今度は光が訝しげな表情をしながらも、コクリとうなずいた。

少年は、光のその反応にさらにショックを受けたようで、少しの間その場に固まっていたが、光が少年を引き戻した。

「……………で、結局あなた誰ですか？」

光の言葉に、少年の視線は光に定まる。

「……………えーと、とりあえず簡単に言つと……………僕は昨日は猫だったアルだよ」

光は二度目の衝撃を味わうことになった。

だが、固まっていたは話は進まないの、光は冷静になろうと努め、確認する。

さつきから気になっていたことだが、よく見れば、少年の髪の毛は、三毛猫の模様のように、ところどころに毛色の違う髪がある。

なぜか服はきちんと着ているのが気になるところではあるが、それはあまり気にしないでおう。

光は、片手で少年の顔をなぞるように触れる。

「……………本当にアルなの……………？」

「……………じゃあ、この状況をどう説明すればいい？」

なんとなくぎこちない笑顔、口調はアルのように思えたから、光は信じることにした。

光は、今日は学校が休みで良かったと思った。

この状態のアルを置いて学校には行けない。

だが、今は根本的な問題があった。
「それにしても、これからどうしようか？」

腹が減っては戦はできぬと、光とアルの二人は食卓についていた。
光の両親はすでに働きに出ている。

アルを見られることはまずいので、これは都合が良かった。

「なんでアルは人間になっちゃったのかな？」

根本的な謎は解決されてはいない。

ずっとアルが人間のままでいると、めんどろなことになるそうだが、それよりも、猫の生活をしてきたアルに、いきなり人の生活をすることはできないだろう。

「……………ずっと戻らないのかな……………」

二人の疑問に返る答えはない。

食卓についてから、光は気づいていたが、アルは明らかに不安そうなお顔をしていた。

ただ不安だけがでていような顔ではなかったが、その表情の中に不安を読み取れた。

食事を終えた光は口を開いた。

「ここでウダウダ考えててもしょうがないから、外に出てみようか。今日は手伝いできないって言うてくるから。」

まあ、せっかく人間になったから、人間の生活も少し体験してみればいいんじゃない？」

光のその言葉に、アルは笑顔で答えた。ぎこちない笑顔ではなく、優しげに顔をほころばせる。

「ありがとう」

光は、アルは元から人間だったのではないかという錯覚を覚えた。そして、今自分が有田優と一緒にいるという錯覚も覚えた。

不謹慎とは思いつつも、光は嬉しかった。

そして、両親に出掛ける旨を言い、光とアルはバスに乗って隣町に向かった。

家の周りはいつも見ているから、光の学校がある街を見せようというのだ。

そうして街に着き、光とアルは街を見て回った。

ただ店をぶらついたり、喫茶店に入ったりしたぐらいだが、アルは始終笑顔で、嬉しそうだった。

光も、アルのその様子に満足した。

そして自分も、久しぶりに味わう幸せな気分には浸っていた。

空が薄暗くなる頃に、光とアルは、家に戻り、周りを見渡せる山に上った。

また車を走らせて。

牧草畑に寝転がって、二人は少しずつ星が瞬き始めた空を眺めていた。

「光、僕は君に言ってなかったことがあるんだ」

ふと、アルが空を見上げたまま口を開いた。

「何？」

光も、同じように空を見上げたまま聞く。

アルは目を強くつむり、何かを決心したように目を開き、言葉を発した。

「僕が光に話しかけたのは、人間の友達が欲しいからじゃなくて、光と話がしたかったからなんだ」

「……………そう」

光がつぶやくように言った言葉に、アルは苦笑をうかべる。

「もうちょっとなんか言ってもいいんじゃないの？」

「言われればそうかな」とは思った。

だって、人間と友達になりたかったら、あたしの他の人間にもどんどん話しかけようとして、人に溶け込もうとするんじゃないかと思ふのよ。

アルは、あたしがめんどうなことになるとはいえ、なんだか避けてるみたいだった」

アルは一つため息をつく、また口を開く。

「じゃあ……………僕が君を好きだっていうのには気づいてた？」

その場の空気が一瞬緊張する。

光はそのまま黙っていた。

いや、言葉を紡ぐことができなかったのだ。

有田優の声でそのようなことを言われれば、変な錯覚を覚えてしまふ。

光は、自分の気持ちに整理がつけられないまま、アルの次の言葉を待った。

アルは空を見たまま言葉を続ける。

その声は冗談を言っているように明るい。

「まあ、気づいてたかどうかはどうでもいいんだ。

ただ言いたいのは、僕が光に初めて会ったのはあの時じゃなくて、もっと前だったってこと。

きつと覚えてないだろうけど、光はなんだか元気がなかった時だ

った。

雨が降ってた日で、雨に濡れてた僕に光は傘を差し出して、ずっと僕に話しかけてた。

僕は返事をする事ができなかったから、光の言うことをずっと聞いてた。

始めは今日はどんなことがあったとか他愛のないことを話して、だんだん難しい話になっていった。

人と人が出会うのに理由はあるのだろうか、とか、体の弱い人と強い人っていう人の差はなんであるんだろう、とか。

結局答えをださないまま、光は帰った。

その時には雨があがっていて、僕はなんとなく気になって光を追いかけたんだ。

だから、それからずっと光を見てた。

光が頭から離れなかつたんだ。光と一緒に話したい、一緒にいたいと日増しに思うことは増えていった。

……僕は、その願いを星が叶えてくれたんだと信じてるよ。

僕は毎晩星空を見つめて、光のことを思っていたんだ」

少しの間、沈黙が流れた。

「アル……」

光は起き上がってアルの方を向いて何か言おうとした。

気持ちの整理はつけられないままだったが、何か言わなければという衝動にかられていた。

だが、目の前にいたのは、三毛猫だった。

光は何か言おうとしたが、何も言えなくなってしまった。

「……戻っちゃったみたい」

どことなく悲しげに、猫のぎこちない笑顔を浮かべて、アルはそう言った。

光はアルに近寄り、アルと目線を合わせた。

「なんだかよくわかんないわね。……まあ、戻って、良かったのかな」

光は複雑な心境でそう言う。

その微笑のような泣きそうなような表情にも、それは表れていた。アルは目線を山の下に移す。

「結局、猫は猫ってことなんだろうね」

なんだかいじめているように見えて、光はアルをかわいらしく思い、顔をほころばせる。

「でも、アルが私と話せるってことは変わらないよ。私はそれで十分」

そして、光はアルの背中を優しくなでた。その言葉に嘘はなかった。

なぜアルの人間の姿が有田優に似ていたかはわからないが、その姿と一緒にいたのは確かに楽しかった。

だが、それはアルと有田優は違う存在だから、それは一時しのぎの实のないことだ。

光は、前を向いて歩いていきたいという気持ちはあった。

だから、今はこれでいい。

アルは表情を変えず、ため息を一つ吐く。

「……そうだね。僕も、光の側にいらればそれでいい」

二人はただ黙って星空を見つめた。

この無数にある星の中のどれかのいたずらに翻弄されていたとしても、それはそれで良い。

むしろ二人は、一瞬の幸福な時間をくれてありがとうと言いたい
ぐらいだった。

R A N * * * 2 0 0 5 / 8 / 1 9 * * *

【番外編】アルが風邪ひいちゃった

「光、なんか寒い」

「はあ？ このくそ暑いのになに寒いつてのよ」

「そんなことぐらいわかってるよ。でもなんか寒気がするんだ」

「……あんだ、もしかして、風邪……？」

「……なぜ……？」

「ちよつと失礼。あら、熱があるみたい？」

「……僕、病気なの？」

「どうしよう。お医者さんの所に行く？」

「えー、医者ー？」

「なによ、なんか嫌な思い出でもあるわけ？」

「……こないだ針を刺したじゃない。あれ痛かったよ」

「あれは予防注射よ」

「猫にだって拒否する権利はあるよ」

「それで死んだら元も子もないでしょ」

「死ぬなんてなんでわかるのさ」

「へ理屈言わない」

「へ理屈じゃないよ」

「……………」

「……………」

「うるさい。めんどろだから行くわよ」

「うわ、何するのさ！ 人権侵害！ 人でなし！！ 暴力反対！！」

「人聞きが悪いわね。猫のくせに喋るんじゃないわよ」

「今更そんな根本的なこと言わないでよ！ うわー、殺されるー」

「ほら、終われば何でもないでしょ？」

「注射すればすぐ具合悪いの治るわ。あとはおとなしくしててね

「まだ怒ってんの？」

「……僕は嫌だって言ったのに」

「でも、楽になったでしょ？」

「さあ、アル、もう機嫌なおして、おとなしく寝よう」

「……光と一緒に寝てくれるならいいよ」

「変な病気うつつたら嫌だから嫌」

「アルが寝れるまで側にいてあげるから。ほら、おやすみ

「……光はずるい」

「何を今更」

「……でも、今回は勘弁してあげるよ」

「そう、それはありがとう」

「おやすみ」

「おやすみ。いい夢見なさい」

「光がいるから、見えるよ」

「……バカ」

「寝るの早いって」

R
A
N

*
*
*
2
0
0
6
/
3
/
1
1
*
*
*

【番外編】光が風邪ひいてしまいました

「光、どうしたの？」

「……なんかだるい」

光はベッドで布団にかぶったまま、眩くように言った。

アルは顔を歪めた。人間で言うなら笑顔にも見える。

アルは光のベッドの側に寄る。

「何……さては、風邪ひいちゃったの？ だからベッドに入りっぱなしなの？」

アルはベッドの上に乗る、光の顔に近づく。

「僕には医者行けとか言ったくせに、自分は何もしないでいるつもり？」

「うるさい。人間と猫は違うのよ」

光はうるさそうに一層布団にもぐりこんで、そう返す。

それでひくようなアルではない。

「人間だって病院行った方がいいに決まってるよ。僕が何も知らないと思つたら大間違いだよ。テレビとかで言ってたんだから」

アルはどうだ！と言う調子だ。

光はため息を吐いて、布団から顔を出してアルを見る。

少し熱にうかされた光の顔は、なんだかけだるげで、目も潤んでいて 要するに色っぽかったので、アルは不覚にも少しドキドキした。

「あんだ、ここから病院行くのに何時間かかると思ってんのよ。その間に余計ひどくなるわよ」

言葉の調子はいつものままで、アルは気を取り直して、少し光から視線をそらしてさらに言う。

「……じゃあ、薬でも飲めばいいじゃん。熱あるんでしょ？」

少しアルの言い方は柔らかくなった。

「……言われなくても、ご飯食べた後に飲むわよ」

「……あーそうですか」

アルは、やっぱり光はからかいがないな、とそれ以上言うのはやめた。

病人を煩わせるのも良くないとも思ったのもある。

「……アル……」

と、光がアルの背中をなでた。

「……ありがとう」

アルは光からは顔を背けたままでいた。

ただ、光の手に尻尾をこすりつける。

アルなりの嬉しさの表現だった。

朝の日差しが温かった。

RAN

2006/3/11

【番外編】動物と戯れる

光の家には、僕以外にも犬や猫がいる。

もちろん、そいつらだって構ってあげなければいけないと思う。思うけど、やっぱり、なんとなく嫌だったりする。

こういう気持ちってのはどうしようもない。

とりあえず、僕はおとなしく光とみんなが戯れる様子を見てるだけ。

別に僕も一緒にいてもいいんだけど、そう、決してみんなと仲が悪いわげじゃないから、勘違いしないように。

でも、やっぱりいつも一緒にいる僕が混じるのは、なんか、ね。だから、とりあえず遠くからみんなの様子を見てるんだよ。

あ、次郎さんが光に飛びついた。

あれって犬の特権だと思うんだ、僕。

だって猫が飼い主に飛びついて、ペロペロなめたりとか気持ち悪いと思うんだよ。

ってか、まず僕がやったら光に怒られそうなのがするし。

うん、で、そうそう、僕が気になってたのはこれだよ。

光、次郎さんになめられた途端、急に変な声が聞こえてきたんだよ。

「んふふふふふ……」

どうやら、光さんの笑い声らしいんだけど、なんか様子が変わんだよね。

「ひ、光さん……？」

やっぱりただならぬ気配に、思わず僕は声をかけてしまった。

と、光の声が止んだ。

少しして、光はこちらに顔を向けた。

「何」

いつもの光だ。

「だけど、なんか怒ってる？」

「いや、なんか今変な声が聞こえてきたんだけど……」

「気のせいよ」

「そ、そう」

僕は光の言葉を素直に信じるしかなかった。

だって、なんか光怖かったんだもん。

でも僕は知ってる。次郎さんだけじゃないんだよね、あの声出すの。

なぜかオスの犬に対してだけ起きる現象なんだ。

僕はそれを知りたいと思うんだけど、なんだか知るのが怖くて、調べられずにいるんだ。

RAN

2006/6/29

魔女編【1】

猫は喋るものなんかじゃない。

ましてや、人間のような仕草もしない。

それは、学校からの帰り道のことだった。

ずっと後ろからついてくる猫が気になっていた。

最初は気のせいかとも思ったが、ずっとついてくる。

角を三、四回は曲がったのに、まだ同じ方向へ歩いている。

これはちょっとおかしいのではないか。

とりあえず、家に着いたので、玄関を開けて中に入った。

部屋に入り、窓から外を眺めると路地が見えるのだが、そこにあの猫がいた。

黒い毛並みの、すらっとした猫は、こちらを見つめている。

私は気になって、猫のもとへ向かった。

「ねえ、あんた、なんか私に用があるの？」

私は猫に聞いてみた。

猫は少し驚いたように見えた。

話せるわけないのはわかってるんだけどさ。

私は当たり前前のようにため息を吐いて、立ち上がるつもりとした。

が、その時、猫が眩しい光に覆われた。

光がやみ、視界が開いた次の瞬間、私の目の前には、女性がいた。

波打ったポリウームのある艶やかな黒髪をなびかせた、ふくよかな体つきの、少々化粧の濃い女性だった。

しかも、全身黒尽くめの異様な格好だった。

そう、例えば絵本によく出てくる魔女のような……。

呆然と私が女性を見つめていると、女性はこちらに近寄った。

「ちょっとあなた、もしかして女の子なの？」

女性はその眉間に皺を寄せ、顔をますます近づける。

「……………はい」

私は思わず仰け反って、驚きつつも何とか答えを返した。

その答えを聞くと、女性は頭を抱えてその場に座り込んでしまった。

「あー！！　なんてことなの！！　私としたことが、男の子と女の子を間違えるなんて！！　というより、あなたが男の子みたいな格好してるから悪いのよ！！　女の子ならもつとそれっぽい外見になりなさいってのよ！！」

女性は立ち上がって、私に指をつきつけた。

確かに、私は部活帰りでジャージを着ていて、髪は短いし、男勝りだから、よく男子に絡まれたりもするけど……………。

そんな無茶な……………。

身体は相変わらず固まったままだが、頭だけは冷静に突っ込みを返せた。

しかし、その間にも女性は一人で話を進めている。

「そうね、これはもうあなたにも手伝ってもらえないわね」

「は……………何を、ですか……………？」

私は訳がわからなかった。一人で話を進めないでください。

「私、若い男の子と恋をするために人間の世界に来たのよ。でも、あまり長い間この姿でいられないの。だからこの美貌で誘惑するっ

てことができないわけよ。そこで、あなたにも男の子探しを手伝ってもらおうわけ。あなたなら、同年代の男の子の友達とかいるでしょ？ 紹介してよ」

「え……………?」

「なんだか、めんどろなことに巻き込まれてしまった……………」。

そして私は、どうこの状況を切り抜けようか頭を悩ませることになるのだ。

魔女編【2】

「それにしても、あなた一体何なんですか。本当は猫なんですか？人間なんですか？」

「うーん、それを話すと色々複雑なんだけど……とりあえず元は人間よ」

「どこから来たんですか？」

「とりあえず、この世界ではないところ。私みたいに、人間が猫の姿になっても驚かれないような世界。ただ、あんまりことすごい違うことはないわね」

「……面倒なので、聞くのはやめます。疑問が出たら、その都度聞きます」

私の理解を超えそうな話だったので、話題を変えることにした。

「うん、そうして」

ローザも面倒だったのか、前足を持ち上げて振った。

実に人間らしい仕草だ。

「とりあえず、名前をつけなければいけないですね。何か猫らしいやつ」

私はその黒猫を家族にバレないように家の中へ入れ、現在は私の部屋にいる。

「私にはローザって名前があるわ。それで呼べばいいじゃない」

だんだん慣れてきたが、やはり猫に普通に喋られると、とても妙な気分だ。

「嫌です。妙にこった名前つけて、すごい猫バカみたいに思われるから」

「何よ、それ」

「決めた。うに。これから、うにって呼びます。」

「待ってよ。私にはローザって名前がちゃんとあるってのよ。だいたいウニって何よ」

「ウニは、ウニ綱に属する棘皮動物の総称。別名にガゼ、ガンガゼなど。多くの種が全身にトゲを持ち、中にはガンガゼのように毒を持つものもある。また、タコノマクラなど一般に知られるウニとはかけ離れた外見を持つものも……」

「そういうことじゃないわよ！ ウニがどついうものかぐらい知ってるっての！ これでも勉強したんだから！」

「あ、そうですか」

「だから、何でウニって名前になるのよ。私からなぜウニが連想されるの？」

「黒いから」

「黒いものつてもっと他にあるでしょ?!」

「あーうるさい！ あんたの名前なんか、うにでいいわ！」

結局、うにになった。

こうなると、世話をしている私の方が上なのだ。

彼女はあくまで違う世界の人間だから、誰かに頼らなければいけない。

ここから、私と彼女の関係は対等になる。

「そういえば、あんたの名前は何て言うの？ これから、一応互いに協力しあわなきゃいけないわけだし、あなたの名前も知っておかないとね」

この女は、何となく引つかかる言い方をする。

だが、これも彼女の性格であって、悪気がないような気がしてきたので、些細なことは流すことにした。

「矢吹藍」

「名前は意外と女の子っぽいね。苗字は男らしいけど」

「そんなのあるの」

「いや、イメージ」

「そう……」

なんか、だんだん疲れてきた。

魔女編【3】

「それにしても、部屋に入ってくる途中で声聞こえたけど、この家には若い男の子がいる？」

「耳よすぎ」

「ね、いるんでしょ？」

ローザは目を輝かせていた。

私は、だんだん頭が痛くなってきた。

「いるけど……」

「兄弟とか？ 何人いるの？ さすがに人数まではわからなかったから」

「六歳上の兄が一人、同い年が一人、二歳下の弟が一人、の三人」

「うわあ、よりどりみどりじゃない！ あんたの兄弟だから、顔も悪くなさそうだし」

「あー、でも、私実は母さんの連れ子なの。だから、男兄弟とは血が繋がってない。だから、真ん中の兄弟とは同い年」

何だか、だんだん話が嫌な方向に流れているな、と思う。

「あら、そうなの。ごめんなさいね。でも、こっちも必死だから、続けるわよ」

「……別に、いいけど……」

そうだろうとは思っていたから、今更気にはしない。

「で、あんたから見て、兄弟の顔はどう。性格とかも」

「……顔は……悪くないんじゃない。兄の拓たくと弟の翼はつはよくイベントごとにはプレゼントもらうし、そうでなくても女性関係は結構あるらしい。あ、拓さんは彼女いたかもしれない。なんかあんまり話したくないから、よくわからないんだけど、それらしい人を見たことある。あと、中の統すむは、少し無愛想だから、そういうのはないけど、密かなファンはいるらしい。友人に聞いた話だけど。だから、悪くはないんじゃないかと」

と言い終えて、ローザの顔を見ると、彼女は非常にいい顔をしていた。

猫の笑顔など、初めて見たが、とても気持ち悪い。

「いや、むしろあなたの話聞いてると、非常にいいわね。これは落としがいがあるわ。彼女持ちは除外しておくけど」

「そう。案外そこは素直なんだね」

「あんまり面倒はごめんなの。やっぱり悪いことだし。そういうこととしても、先は見えてるわ」

「まあ、手近で見つけてくれると、私もどうしようか考えなくていいから楽でいいけど」

「あんたはいいの？ 兄弟となんかーとか、そういう嫌悪感とか、ないわけ？」

「妙に気を遣ってくれるのね。別に、惚れるのもどうするのも自由だし」

「でも、翼は結構女に慣れてるから、そうそう落ちるイメージがつかないな。統は、本当無愛想だから、女が好きなのかどうかさえ疑問だ。嫌味だけは一人前だけど」

「……ん、その統君にはなんか引かかる言い方するのね」

「うーん、あいつはよく私につつかかってくるからね。何が気に入らないのかわからないけど。学校ではあまり話しかけてこないけど」

「ふーん」

ローザは、首をひねって、私の顔を見ている。

「何、あんたもひっかかる言い方ね」

私は何だかイライラして、ついきつい口調で聞いてしまった。

いけないと思ってはいたが、思ったことがすぐ顔に出してしまっため、どうしようもなかった。

だが、ローザはそれを見通しているかのように、変わらず笑んでいた。

彼女は表情がコロコロ変わる。それが猫だと、非常に君が悪くて仕方がないのだが。

表情が変わっても、奥底の部分はさらけ出さないような。

何となく扱いづらい感じはした。

「別に。私、人のこと、そんなに興味ないし」

「うん、っぽいよ」

「とりあえず、あなたには、友達だ、とでも言っつて、その兄弟に紹介してくれるだけでいいわ。後は私で何とかするから」

「それも結構難しいけどね。さっきの姿だと、私との接点全然わかんないんだけど」

「友達の友達」とでも言っつておけばいいでしょ」

「……まあ、じゃあ、それでいっつてみる」

大丈夫か、という心配はあったが、この家の者は妙にドライなところがあるので、もしかしたら気にしないかもしれない、という思った。

しかし、そう思っつても、やはりこの女を家族に紹介するのは、気が重かった。

RAN

2007/9/3

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3337r/>

私とネコ

2011年8月7日03時15分発行